

郷土博物館・文学館だより

特別展

「作家・平岩弓枝展一人と作品一」



開館式典で挨拶をされる平岩氏



文化勲章と平岩氏の愛用品



会場風景

開催中

当館では、ベストセラー小説『御宿かわせみ』をはじめ、数多くの作品を世に送り出してきた作家・平岩弓枝氏の特別展を開催しています。

平岩氏は昭和7年(1932)、渋谷区内にある代々木八幡宮に生まれ、27歳の時に『塹(たがね)師』で第41回直木賞を受賞し、文壇デビューを果たします。脚本家としても活躍され、「肝っ玉かあさん」「ありがとう」などのテレビドラマは国民的人気番組となりました。

平成18年に渋谷区名誉区民に顕彰され、28年には文化勲章を受章した平岩氏は、現在も渋谷で執筆活動を続けられています。

特別展初日には当館において式典を行い、平岩氏よりご挨拶をいただきました。

会場では、渋谷を舞台とした作品を紹介するほか、小説・脚本の直筆原稿や平岩氏の愛用品を展示しています。

旧渋谷小学校と梨本宮家

来年1月に渋谷区役所は仮庁舎から新庁舎へ移ります。仮庁舎第一庁舎の入口前には、ここに旧渋谷小学校があった頃からの記念碑などが置かれていますが、その中の一つに、「梨本宮賜邸地」と書かれた境界石があるのにお気づきでしょうか。

その名前の通り、かつてこの付近には、梨本宮家の広大な屋敷がありました。あまり耳にしない名前かもしれませんが、それは戦後いっせいに皇族の籍を離れた11の宮家のうちのひとつだからです。そのときの当主で、渋谷小学校にゆかりのある梨本宮家3代の守正王は、明治7年(1874)に久邇宮(くにのみや)家に生まれ、18年に梨本宮家を継承しました。そして明治33年に、やはり渋谷に広い土地を所有していた鍋島直大侯爵の次女伊都子と結婚します。その婚姻に先立つ2年前、守正王はこの現渋谷一丁目付近の敷地を取得しています。

明治8年に開校した渋谷小学校は、渋谷に梨本宮邸ができた当時、現在の渋谷駅東口付近にありました。学校では大正10年(1921)に、大規模な校舎改築と運動場の整備が行われることになりましたが、そのときに学校に近い梨本宮家からは、500円が贈られました。竣工後、学校ではそのことを記念して御殿山と記念碑をつくりました。この記念碑もまた現存しています。そして14年の創立五十周年記念式典の際には、守正王の次女規子女王からピアノが寄贈されています。なお、今でも交差点名などに残る「宮下」の旧町名は、宮邸の下にあるという意味で、昭和3年につけられたものです。

太平洋戦争が激しくなるさなかの18年、渋谷小学校は建物強制疎開にともない、北に300mほど離れた現在の渋谷キャスト付近に移転します。しかし20年5月の山の手一帯を襲った大規模な空襲により被災します。このときに広大な宮邸も全焼してしまいました。

戦後、校舎を失った学校では廃校問題も起こりますが、多くの人々の尽力により、被災した宮邸の敷地跡の一画に移ることになりました。そして23年11月に6教室からなる木造校舎が完成しました。一方、その前年に皇族の身分を失った守正は、わずかに焼け残った茶室を住まいとしていましたが、26年の正月に急逝しました。伊都子夫人はその後、運動会などの小学校の行事にたびたび出席し、交流が続いていましたが、51年に95歳で亡くなりました。

渋谷小学校は、平成9年(1997)に大和田・大向小学校と統合して神南小学校となり、この場所を離れますが、この境界石と御殿山の記念碑が、宮家と小学校との関わりを今に伝えています。



「梨本宮賜邸地」と書かれた境界石

虚子が詠じた冬景色

俳人の高浜虚子（本名・高浜清）は明治7年（1874）に、愛媛県温泉郡長町新町（現・松山市湊町）で生まれました。伊予尋常中学校（現・愛媛県立松山東高校）在学時、正岡子規に兄事して俳句を学び、24年に子規より「虚子」の号を授かります。

27年、虚子は在籍していた仙台の第二高等学校（後の東北大学教養部）を中退しました。その後上京し、子規が病室兼書斎および句会歌会の場所として使用していた建物「子規庵」（東京都台東区根岸）で世話になり、一家総出で神奈川県鎌倉市に移住する43年までの16年間を東京で活動しています。

虚子は31年、自身が主宰する俳句雑誌「ほととぎす」の発行所を愛知県から東京に移しました。「ほととぎす」は前年に愛媛県松山で柳原極堂が友人である子規の協力を得て創刊した雑誌でしたが、その後、創刊当時は選者であった虚子が極堂より有償譲渡されました。東京移転後、虚子は「ほととぎす」を文芸誌として広めるために、俳句のみに留まらず和歌・散文などを掲載し、大好評を博しました。この時期「ほととぎす」に寄稿された作品に、夏目漱石の「吾輩は猫である」、伊藤左千夫の「野菊の墓」などが挙げられます。

虚子は東京で開催される各所の句会に出席しました。うち渋谷では「家庭俳句会」「玉藻俳句会」などに出席し、俳句の推進活動に貢献しました。

静さに耐へずして降る落葉かな
話のせて車まつしくら暮の町
焚火そだてあたりしが立ち歩み去る
吾（わ）も老ひぬ汝（なれ）も老いけり大根馬（だいこうま）

（「雑詠」）

神近き大提灯や初詣（はつまうで）
肅々と群聚はすゝむ初詣
清洋の空や一羽の寒鴉

（「明治神宮初詣」）

これらの俳句は、虚子が渋谷の地で詠んだものとされます。「雑詠」では晩秋から年末の空気に流れる静けさ、その中に年の区切りを迎えてほのかに浮き立つ心情を垣間見ることが出来ます。一方「明治神宮初詣」では、年はじめの荘厳な雰囲気と冷たい空気が「神近き」「寒鴉」などの言葉に表現されています。

明治・大正期の渋谷、寒風吹く街角で展開されたであろう風景を見たままに表現した作品群は、事実を客観的に描写し、主観をその後ろに匂わせる「客観写生」、自然界および人事界の現象を詠む「花鳥諷詠」という、虚子の俳句理論を代表する二つの理念を彷彿とさせます。

『定本高浜虚子全集
〈第2巻〉俳句集』
毎日新聞社
昭和48年（1973）





慰問袋 (いもんぶくろ)

「慰問袋」とは、戦地にいる兵士を「慰め」「励ます」ためのちょっとした贈り物を入れた袋のことです。当時は中身も含め「慰問袋」と呼ばれていました。

この資料には、「宇知三新夜麻牟」との文字がありますが、これは太平洋戦争中の戦意高揚のスローガンで、「敵を撃たないでおくものか」との意で、横には日本がアメリカをうち倒す絵が描かれています。

「慰問袋」は、家族や親類、友人など、知り合いに贈ることもありました。多くは子どもや女性など銃後を守る人たちが軍に寄贈し、軍が兵士へ配布する仕組みがありました。戦争が本格化し、戦地に赴く兵士の数が増大すると、地域や職場、学校などに対して「慰問袋」を送るように呼びかけが行われ、割り当てがされる場合もありました。

「慰問袋」は、商店などで売られる既製品も多かったものの、さらしなどで袋を作り贈る場合も多かったようです。

袋に入れられたものとしては、当時の人の話や記録によると、具体的な決まりはなく、日用品を中心に色々なものが入られたようです。具体的には、お菓子や医薬品、ゲームや雑誌、缶詰や下着など様々です。しかし、戦争により物資不足が深刻化すると、子どもたちの手紙や絵などが多く入れられ送られました。

「慰問袋」がどれだけの数贈られたかは分かりませんが、遠く離れた戦地で戦う兵士にとってどれだけ慰めになったかわかりません。受け取った兵士は大変喜び、後にお礼を言うために贈った人のもとを訪れることも多くあったそうです。

【今後の展示予定】

◆特別展「作家・平岩弓枝展—人と作品—」

平成31年1月20日(日)まで

◆新収蔵資料展

平成31年1月29日(火)～3月24日(日)

◆第19回渋谷現代短歌 入選作発表

平成31年4月2日(火)～14日(日)

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00 (入館は16:30まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) / 小中学生:50円(40円)

※()内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.39

平成30年12月25日発行